◆伊藤慈秀　選

長らへてわれもこの世を冬の蝿

永井荷風のこの一句は、八十路の私には身につまされ、そのうえユーモラスな哀愁を感じさせます。荷風は昭和三十四年七十九歳で孤独死し、独身の淋しさ、哀しさの他に世にスネる気持ちを率直に詠んだと云われますが、この句は明らかに今日の高齢者問題を先取りしていて、スネるのではなく明るい滑稽感に満ちています。

◆久松久子　選

鞭打ちの今朝は激しき干蒲団　　原田　曄

昨夜は何があったのでしょうね。今朝は激しいと言うのですから、思い余っての鞭打ちの刑。はい、そこまで。蒲団に八つ当たりしてすっきり。

七五三祝いて捻る五七五　　酒井鹿洋

数字をうまく使って成功。捻ったのですから、やっと出来た一句かも。然し、俳句をしているからこそ授かった句。俳句命。

傷物が傷物を買ふ林檎市　　新島里子

傷物同士で同情。相憐れむ心境がちらり。傷でもとても美味しいのもあります。捨てる神あれば拾ふ神あり。それで世の中うまくいっています。

想ひ出も解けゆくなり古セーター　　藤本和香

心をこめて編み上げた新婚時代のセーター。今は只の同居人となった夫婦の顔が見えてくる。が、その反面、安心しきった穏やかな老後。

誰しも少しの不満を許し合って滑稽俳句に詠い上げ、生きている。人の良さが見えてくる。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

◆日根野聖子　選

毎月、相当な数の句集が出版されているにもかかわらず、そのほとんどは自費出版である。そのために、広く世に出る事が無いままになっている名句、滑稽句がある。著者ご本人から直接いただいた、あるいは、知人から紹介された句集の中に見つけた滑稽句を、一人でも多くの方にご紹介できればと思う。

河村正浩　句集「春宵」

うつかりと年玉はづむ酔なりし
うんちくもとろりと煮ゆる七日粥
たつたひと言捨てに行く梅月夜
酔へばすぐ天下国家の夏座敷
ぎんなんを踏んで颯爽とは言へず
しわくちやの顔くちやくちやにちやんちやんこ
一合の酒あれば足る寝正月
人参紅し吾が血潮なほ紅し紅し
立春大吉まつすぐに棒の影
青虫毛虫ふるさとを喰ひつくす
蟻這ふにまかす新聞休刊日
檸檬酸つぱい娘が二人孫二人
猪喰つて生き物感覚淘汰せり
着膨れてなんだかんだと甘納豆
椿落つる音暗がりに耳無数
咲いた咲いた桜が咲いて病む列島
喪の酒にしつかり酔うて春時雨
虹を見るただそれだけの非常口

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

いつからか即かず離れず夏の蝶
オカリナの音色は月へ泣きにゆく
ねこじやらし風に退屈なかりけり
鯉に髭老人に杖春来る
唇のやうな椿のこちら向き
身ひとつに頭痛腰痛梅雨深し
尺蠖の落ちてやをらに尺を取る
とは言へど熟柿に口を吸はれけり

著者は、昭和二十年生まれ。山口県在住。平成六年に「山彦」を創刊、主宰。昭和六十三年を頂点に半減してしまった山口県の俳句人口の減少に歯止めをかけようと、句集の表記に工夫をしたり、全く新しい独創的な文化活動も展開している。写真、生け花との「コラボ展」を開催し、若い人や俳句に関心のない人からも絶賛され、好評を得ている。

河村正浩氏出演の「八木健のＣＡＴＶ俳句」は、滑稽俳句協会のホームページで閲覧可。第三十六回放送分にご出演です。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。